金田地区の産業　養蚕業（５）　地区の方々からの聞き取り　（２０２４．４）

入野地域の桑畑は、鈴川を越えて玉川（渋田川）まで広がっていた。
桑畑が広がり、中原が見えないくらいで、畑という畑は全部桑畑だった。

金田地区の畑地のほとんどが桑畑として利用されていた。

桑の葉は竹籠で背負い畑から運んだ。蚕が幼い時には桑の葉を中国包丁のような刃物で切り、大きくなると枝ごと与えた。籠は、入野東町の「かごやさん」で作られていた。

蚕の餌は、春と夏に桑の葉を、秋には枝ごと採り与え、枝は燃料にも利用した。そのため桑の古木は幹が太くなり、植え替えの時にはたいそう苦労した。

養蚕が始まると人間は居候、住んでいるのはオカイコさん、人間は隅っこに居ることになった。

養蚕農家は身体のすきがないくらい働き、毎晩１２時ごろまで蚕の面倒を見るので大変だった。蚕は中二階で育て、桑の葉を食べる「わさわさ、おそおそ」という音が、子供心にうるさく聞こえた。子供の頃、各家には蚕の棚があり餌にする桑の葉つみをした。

養蚕は農家には現金収入源として有効だったが、「ねずっこ」で作業せねばならず手間がかかった。

養蚕は、年３回で春１回と秋に２回行った。繭の仲買人が買い付けに来ていた。

小さな銀色の天秤ばかりで繭玉の計量がされていた。

悪い繭は自家消費用として真綿を作ったり、機織機で布に織り上げたりした。

金田では大体の家が養蚕をやっていたと思う。戦時中の食糧難の時、桑をこいで、食べる物を栽培した。昭和２３・４年だったか、食糧増産をもって終了した。

養蚕の全盛期には、一回の売り上げで百円ぐらいになり、農家には相当な現金収入になった。当時、十円札は養蚕をやっていないと見られなかった。
当時の百円は小学校の校長の給料に相当していた。米の価格は一俵、二十円程度だったと思う。